校長室だより～燦燦～ №６００

懐中電灯

2022.8.8

砂漠を旅した人の話である。夜、広い広い砂漠の中で寝袋に入って寝る。ふとトイレに行きたくなって目が覚める。しかし、寝袋から起き出してすぐ近くで用を足すわけにはいかない。離れたところでと懐中電灯を片手に少し歩いていき、用を足す。寝袋のあるところに戻ろうとすると、戻れない。何もない砂漠では、方向感覚も距離感覚も簡単に失ってしまう。

だから、砂漠で野営地を離れるときは、懐中電灯は持っていくのではなく、明かりをつけて寝袋のところに置いておく。その明かりを見失わないように離れれば、容易に元の場所に戻ることができる。

哲学や信条などは、その懐中電灯のようなものである。懐中電灯をつけ、寝袋のところに置いて離れるには、そのことに意識的にならなければならない。日々の生活では必ず意識的にならなければならない場面がある。そういったときに哲学や信条が明確だと、的確に方向を選び取っていける。

特色ある学校づくり、特色ある教育活動というフレーズをよく聞く。何か特別なことをしなければならないように思えてくる。だが、どの学校もやっていることは、そんなに大きくは違わない。では、どうやって特色を出すのか。

学校もそうだが、組織というのは、９０％はやることが決まっているように思う。予算もそうである。毎年使い道が決まっている。どうにも手を出しにくい。校長の裁量で動かせる部分が、いったいどのくらいあるのか。これでは誰が校長になっても同じではないか。そう思う方もいるだろう。

しかし、違うように思う。わずか数％だとしても自分の裁量のうちにあるものを意識的に動かしていく。すると、それが動かせない９０％に逆作用して、動かせないはずのものが徐々に動き出す。今までと同じことをやっていても、９０％の見え方が変わってくる。輝いてくるかもしれない。

特色とは、そういったものなのかもしれない。だとすれば、校長がかわれば学校が変わるというのもうなづける。このかわればの「か」が問題である。「替」なのか「変」なのか。どちらも当てはまる。わずか数％に働くのが、経営方針であり、哲学、信条、信念である。

そう考えると、懐中電灯は大切である。それがあるから、いつでも戻ることができるのである。立ち返ることができる。

この「校長室だより～燦燦～」も本日で６００号である。毎号、何の規則性もなく話題を取り上げている。発行計画や見通しがあるわけでもない。だが、何かしら根底に流れているものはある。同じ人間が書いているのだから、それはそうであろう。ゴールとして、何号を目指しているわけではない。今のところ、懐中電灯の明かりを見失ってはいない。だから、これからも続けられる。